

あっても自分が死ぬのではないかという強い恐怖を味わった場合にも、トラウマになる可能性がある。

その他に、悲惨な事故現場を目撃した人も、その光景が頭に焼き付いて離れなかつたり、自分の身に起こったかのように恐怖を感じる場合がある。この中には、救援にきた消防士や警察官も含まれる。家族や恋人など被害者に近い立場にいる人も、被害者が悲惨な目にあつたということに直面することによって強い衝撃を受ける。もし、亡くなった場合には突然の死というショックや悲しみ、喪失感を激しく感じるようになる。

このように一つの事故であっても、多くの人々がトラウマになってしまうことが考えられる。ここでは、まず交通事故を直接体験した人の一般的な反応について、時間経過とともに記述する。

3. 精神的影響の全体像

図-2に急性期と慢性期にわけて交通事故による精神的反応の全体像を示した。まず大切なことは、多かれ少かれどのようなレベルであれ、なんらかの反応はきたすということである。こういった反応の多くはこのような事故にあつた場合の、人間の正常な反応ということができる。ただし、正常と病的の間には明確な線が引けるわけではない。トラウマの正常な反応と病的な反応はその種類が違うというより程度の違いとして表れるものが多い。その症状が強くて、苦痛がひどかつたり、社会生活や日常生活に支障をきたすような場合に医療が必要なレベルと判断される。

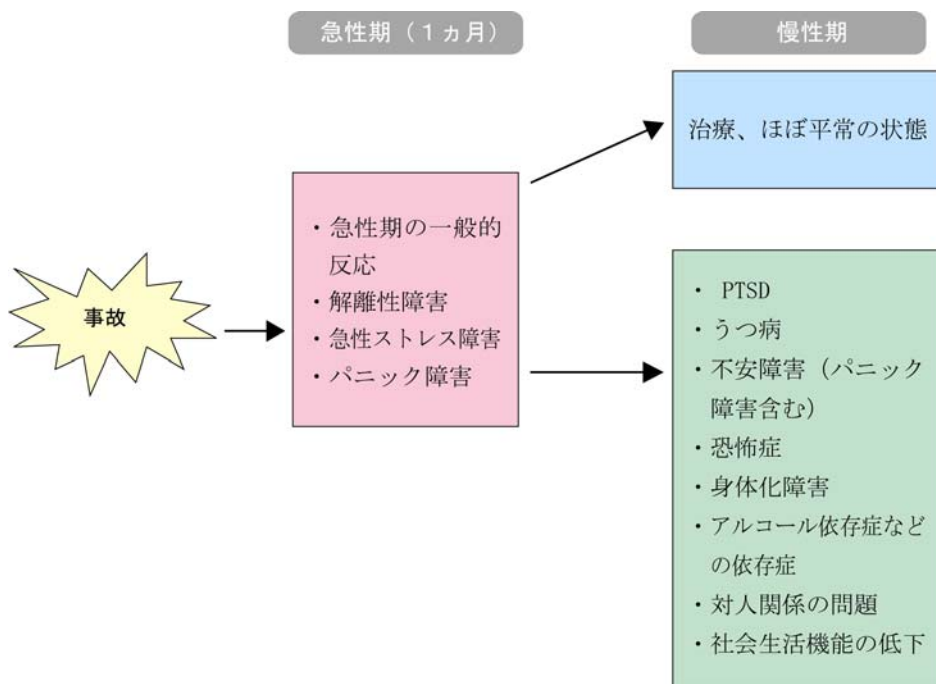


図-2 交通事故による精神的反応の全体像